

昭和二十七年二月一日 第三種郵便物認可  
昭和二十四年六月三日 國有鉄道特別承認雜誌第一一九九号

# 經濟論叢

第101卷 第5号

---

## 哀 辞

故佐波宣平教授遺影および原稿

- ミュール型紡績工場 ……………堀 江 英 一 1
- 部門間の連関構造 ……………山 田 浩 之 雄 23  
井 原 健
- 原価管理思考としての変動予算概念 ……………野 村 秀 和 43
- 低開発国開発計画における技術選択 ……………名 畑 恒 64

## 記 事

佐波教授逝く

追悼講演 (山田浩之 前田義信 谷山新良 森嶋通夫 上田三四二)

追憶談 (葛城照三 安間進)

故佐波宣平教授自作年譜

---

昭和43年5月

京 都 大 學 經 濟 學 會

## 佐波先生をしのんで

森 嶋 通 夫

私は戦争中から戦後にかけて、この大学で学んだものであります。ごたごたした状態のもとで学生生活を送ったために、私は学生として先生に習うという機会にめぐまれませんでした。私が佐波先生に親しくしていただけるようになったのは、次のような、すこし変わった事情からであります。

多分昭和24年頃であったと思いますが、私はこの大学で英書講読をやっておりました。教科書は多分、オスカー・ランゲの *Price Flexibility and Employment* であったと記憶しますが、ある日のこと、まだ若かった私に不相応な学識と地位と年齢の方が、講義に列席されているのを発見して、驚ろくと共に非常に当惑したのを、おぼえております。佐波先生が数理経済学に本格的に興味をお持ちになられたのは、多分その頃であったと想像いたします。当時の先生の御年令は、ちょうど今の私と同年齢であったと思います。このことが機縁になって、それ以後私はたびたび先生のお宅にうかがって、数理経済学のお話をするようになりましたが、それ以後は、周知のように、先生はつぎつぎと大病にかかれ、したがって先生との数理経済学をめぐっての会話も、ほとんどすべて先生のベッドのそばで行われた次第です。先生の数理経済学の研究が、数多くの、1つ1つが致命的な大患との闘いのなかでなされたことを、私たちは忘れてはなりません。

数理経済学に関する先生の最大の御業績は、交通・海運問題という、通常経済学者があまり立ち入らない特殊問題に数理経済学的分析を適用して、その有効性を確認された点に存在すると思います。その成果は、『海運動学入門』に集約されていますが、先生は晩年には、一般的な数理経済学固有の問題にも、興味をもたれ、最後に書かれました『弾力性経済学』は、(私が「経済評論」で書評しましたように)数理経済学の教科書として、非常にすぐれたものであるだけでなく、数理経済学を専門的に研究しようとする人々にも、ハンド・ブックとして、極めて有用であると信じます。

闘病生活を通じての、佐波先生の信条は、徹底した合理主義をつらぬくということであったと想像いたします。私は、おそらく佐波先生は、最後まで信仰というものをお持ちにならなかったのではないかと思います。そのかわりに先生は、近代医学を最後まで信じられたのだと思います。そして合理主義の正しさを、自分の身体を実験台にして実証しようとされたのが、先生の最後の命がけのお仕事であったと、私は思っております。

しかし他方において、佐波先生は、一見したところでは非常に非合理的な意図をももっていられたようにも見えます。それはどういうことかと申しますと、私達の数学的な

寿命は、ずいぶん短かく、通常の場合で、40歳前後、他の場合にはもっと早く mathematical death がくるといわれています。佐波先生が数理経済学に興味をお持ちになられたのは、先ほども申しましたように、44~5歳前後からでありますから、先生は普通の人ならば当然数学的寿命がつきている頃に、数学的研究をはじめられたこととなります。そのことに必然的に伴う苦難がどれほどの苦難であったかと言うことは、私達の想像を絶するものであったであろうと想像いたします。晩年は、数理経済学の研究に捧げられたと一口に言ってしまえばそれまでであります。人数の法則に逆行して、成果をあげることがどれほどの難事業であるかを、我々は充分かみしめて考えてみなければならぬと思います。先生は生理に逆らうことのむづかしさを、よく知っていたらぬと思います。またそれ故にこそ、先生は徹底した合理主義を採用されたのだと思います。すでに教授の地位にありながら、一助手の講義に出席されたのも、ほんのその一例であり、私の知らない同様の、またそれ以上の徹底した生き方を、先生ははしていられたと確信いたします。「数学的な死」に挑戦するという無謀ともいえる意図を合理化するために、先生は徹底して合理的な生活をされたと思います。合理主義は正しいものであり、美しいものであり、頼みとするに足るものだというところを、先生は明らかにして下さいました。佐波先生の御生涯は美しく純粋であります。それは少女のもつ清純さではなく、獲物におそいかかる鷹が、最も合理的な姿態をとった時の美しさに、なぞらえることが出来ましょう。

もしこの世の中に神がいるといたしますならば、恐らく神は、私達に肉体と生命を与えるに際して、それぞれの肉体と生命の限界をきわめるよう、我々に命じたことでしょう。このような寓話的設定にもとづいて、私達の人生とは、それぞれの肉体と生命の限界を探究するためのものだと、考えることが出来ます。佐波先生は、誰よりも深くみきわめて、先生の生命と身体を神に返還されましたが、この先生の意慾に満ちた——しかし激しい苦痛を伴った——探険に、同時代の人達のみでなく、今後生れくる大勢の人達も、深い尊敬と感謝を捧げつづけるものと信じます。思い通りに生きると言うことは、非常にむづかしいことであります。それだけではなしに、思い通りに生きて人から愛され尊敬されるということは、一層むづかしいことであります。勇気と正義と慈愛に満ちたこの稀有の人格を失った、私達の空白は、何時の日にも回復されることでしょう。

深いかなしみにうちひしがれておられる御夫人や御令息・御令嬢達にとって、このような先生と御生活を共にされたことと、このような先生の血肉を受けつがれたことは、かけがえのない誇りであり、喜びであることと信じます。私もちょうど先生が数理経済学をはじめられた年令にさしかかっております。今後私は先生とのつき合いの思い出をかみしめながら、生き続けることでしょう。